



「先端研ソーシャル・レビュー」00号発刊に寄せて

R C A S T

東京大学 先端科学技術研究センターは先端を研究する研究所です。先端を研究するとは一体どういうことなのでしょう。これを説明するのも所長の仕事であり、先端とは何か、その探求とはいかなる活動なのかについて、いつも考えを巡らせています。同時に、先端研内でもこのことについて、構成員で真剣に議論してきました。

その中で、「先端を拓く研究」として社会から大きな期待を集める前の、さまざまな種が詰まった原始宇宙のようなものが先端研であり、その種が交じり合って「先端」として芽吹き、社会の応援を得て市民権を得ていく過程こそが、先端研の活動ではないかと考えるようになりました。

私が学部2年生に講義していた量子力学における波動関数は、対象に関する全ての情報を含んでいますが、波動関数そのものは私たちから認識できる形になっておらず、「観察」することで初めて私たちが知りたい情報を波動関数から取り出すことができます。たとえば、物質を構成する原子のなかで、原子核の周りを電子がどのように動いているのか、電子は存在していても、私たちが何もしなければその様子を知ることはできません。別の電子を衝突させるなどの観察操作をして初めて、電子の様子が可視化されます。

先端研自体が、明るい未来の多様な種が詰まった波動関数であり、そこに「問い」を投げかけることにより、だれも認識できていなかった未来へのアプローチが可視化される、そんなアナロジーを私はイメージしています。まだ認識されていないモヤモヤとしたところに、ターゲットを定め、先端の可視化を試みていく。これこそが先端研の活動なのだと思います。

地球上のありとあらゆるものが、明るく豊かな、より良い未来へと向かうための突破口が先端であり、そのドアをこじ開けることに、我々はずねに挑戦していきます。そのドアは、新しいテクノロジーだけではなく、鳥と会話ができる世界を認知することかもしれないし、誰かに攻撃的な言葉を発すると自動的に優しい言葉に直してくれる装置の開発かもしれません。そうした探究は、新しい価値観を創り出すことにも繋がっていくと考えます。

まだ見ぬものを見出し、そこから拓ける道の先にある未来において、地球上のすべてに明るい調和をもたらすように奮闘する等身大の姿をこの一冊に可視化し、そこから始まる皆様との対話と共創により、私たち先端研はずねにレベルアップしていきたいと思っています。

杉山正和

